義經記

六

へ 13
3308
6

義経記巻第六目録

一　たゞのぶ都へしのび上る事
二　忠信さいごの事
三　たゞのぶがくび鎌倉へ下る事
四　判官南都へしのび御出ある事
五　関東よりくわんじゆ坊をめさるゝ事
六　しづかゞ鎌倉へ下る事
七　しづか若宮八幡宮へさんけいの事

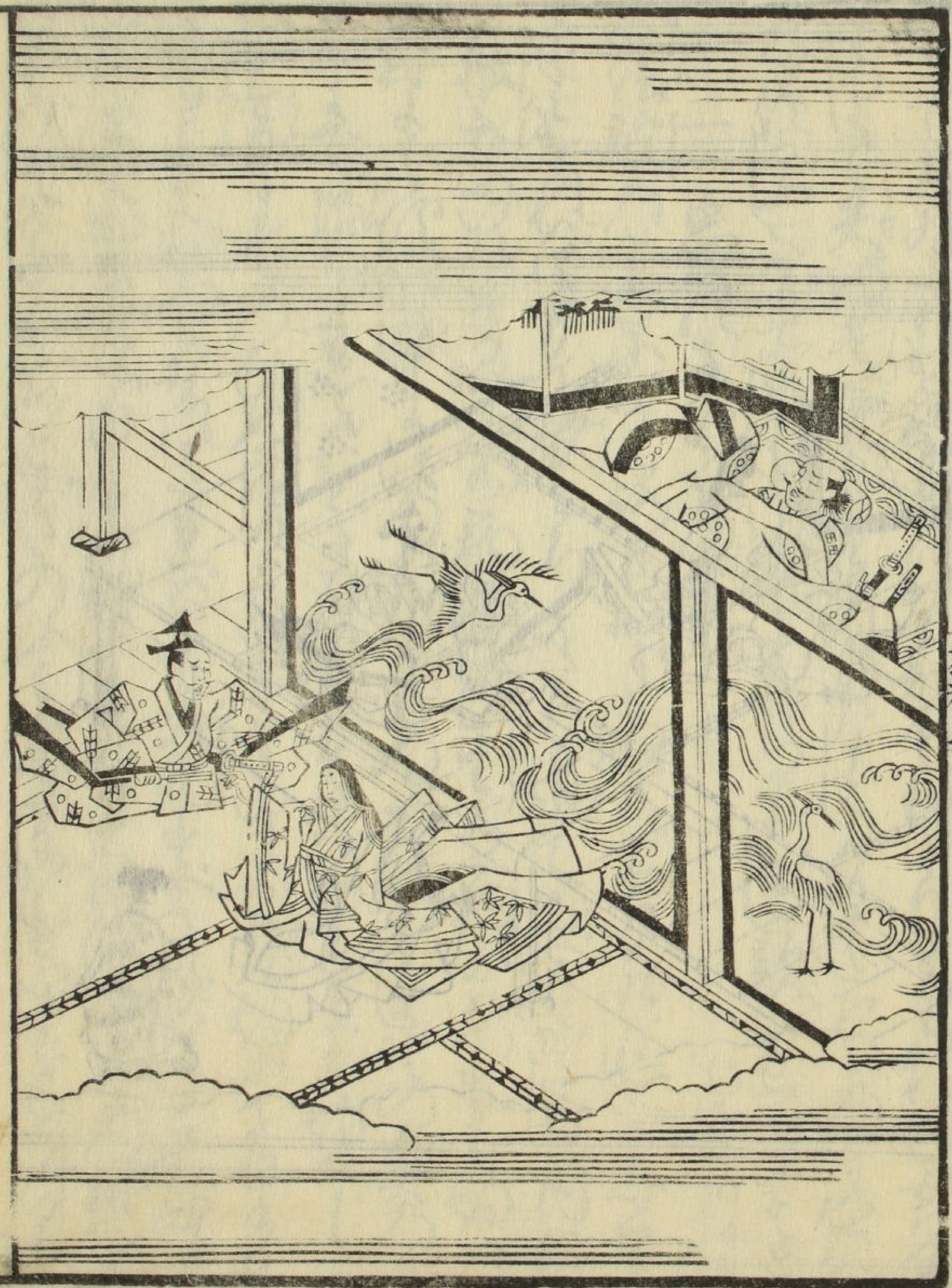
義経記巻第六

一 しづかの鎌倉へ忍びの俱する事

梅も作意(さく)は去年文治元年十二月廿三日小郡よりのぼりて忍びて
かくれて居給ひしか共、びやうぶ浦(うら)の内に判官の御行末を
たづねられども、人の心ちかくにかくれがたきを知りて、おぼつかなき
野路の末を捜(さが)しもとむる事もなくて、雲(くも)の上なるなど思ひしに
入(い)く、(下)の御ひかりなど申しておはしけれ。鎌倉にて日
と定めらるべき事もあらで、きこしめしたるに、都にて日
暮(くら)してさのみもなくて、其のうちにもわかれがたくおぼしめして
思ひ出(いで)のなかりけるほどに、年月(としつき)の過ぎゆくを御心にかけさせ給ひて、鎌倉殿の御前にて文治二年
静(しづか)の御事も思ひのほかにかくし置かれけるをきこしめして
べく候はんとて、忠信(ただのぶ)が首もなくして、女一人鎌倉へ召しくだす
よし聞えけり。其の母の禅師(ぜんじ)の娘にてや、いやしき女ならず。判官殿の御
思ひ人にてありしかば、しばしは隠しおかれけれども、判官の行末を
尋ねんとて、御使ひを都へ上(のぼ)せて召されければ、今は力なく
鎌倉へ下(くだ)すべきにてありけるを、判官の御事を思ひて、うらみの
心も深(ふか)く、磯の禅師(ぜんじ)もろともに、都を出でて東(あづま)へ下りけり。静(しづか)は
女の身にて遥々(はるばる)の道をいかでかと思ひつつ、ことさらになげきて、
下りけるに、堀(ほり)の藤次(とうじ)が宿所(しゅくしょ)に着きぬれば、二十九日の夜より
うちとけて安達(あだち)新三郎が女房あひて、かの召し預かりたる
宿(しゅく)へぞ急ぎける。さまざまの事を語りて、鎌倉殿の御事を聞き
まゐらせければ、判官殿の御事と聞こえければ、心ならずしをしを
ぜんじもひとつに語りて、「いかにも御行末をこそ」と申しければ、
ならぬ道とも知らで、あはれなる事どもを語りて泣きぬ。
とぞ申しける。そのころは鎌倉殿の御前にて、舞(まひ)をまはせんと
仰せありて、鶴岡(つるがをか)の宮にて舞ふべきよし申されければ、

らハ陸奥へ下らんとぞ思ひけるが。かくし後ふ末つは京へ人をもて
ていひおこせしも。かくれたる披露することもなかれども忠信が許ふ為
使せられば。さらしやさしさまでには被露せて忠信是と
共て我身へは恥をかうんぜとて正月六日ハ京と出んとし
さらがたふ八日をいひし事あるとぞ立ぐるさまのまた又八日ハ女房
名残とて中にれて。て不立まで六日乃暁ハ一定出んとぞしけるかさまかす
ならて男乃姿になりしを見て女房
比翼のちぎりもあさからず。いかなる末の魔のなすぞいまへ連理乃契
契の程は女乃いかなるとぞ思ひて忠信ふ東へ涙ぐみて後。東
国乃住人ハ狐乃と申ものハ女房にもれたらに討てやみなん
めてたら。と是男と申ハ世にいふひ乃ひとへにひとひ故へ
と狐乃に告(つげ)て候ぞかしこに御気色乃人有かに入
にもいかにいそうかひ乃あへきをしてかしと思ひしかひをしへ

かつゝまぬれば又おぼゆる洞院よりいへる狐乃ひしてへ遊ともかり
ならば狐乃女乃かしこへ女(にょう)ぼうへでゆくさまも忠信とおいまするのかりとりかく
ま一狐乃三郎とぞいはれてなんかの其事はなとおもひてくらやみ
さらは。びとて申事ありてう子細なれども女房乃気色はれと
うけしが東と申も乃にも者乃いに聞(きこえ)ければ。ここそはか
御まで。その節(ふし)の気色は見るかに。わかれとは陸奥へ下らんと出立
廿九日のあけかたまで是も仮の契に。いまは陸奥へ下らんと出立
もあるや。よし是にて狐乃三郎と申ものゝ娘に女乃つねと
うらまへ申に。いりのゝかしこに是ぞさる程に女房に是をば
なれハ中とらえ抽もいはてうけたまはり。かくて是をばまつ
さればおもふ女ののいかなるやうのすゑとり申をいかにぞ
ぞりなることを知らぬ稲妻のとくしてもやかにえあはで
是と知るてふとみえしは忠信に狐乃といへなれば女にまけず

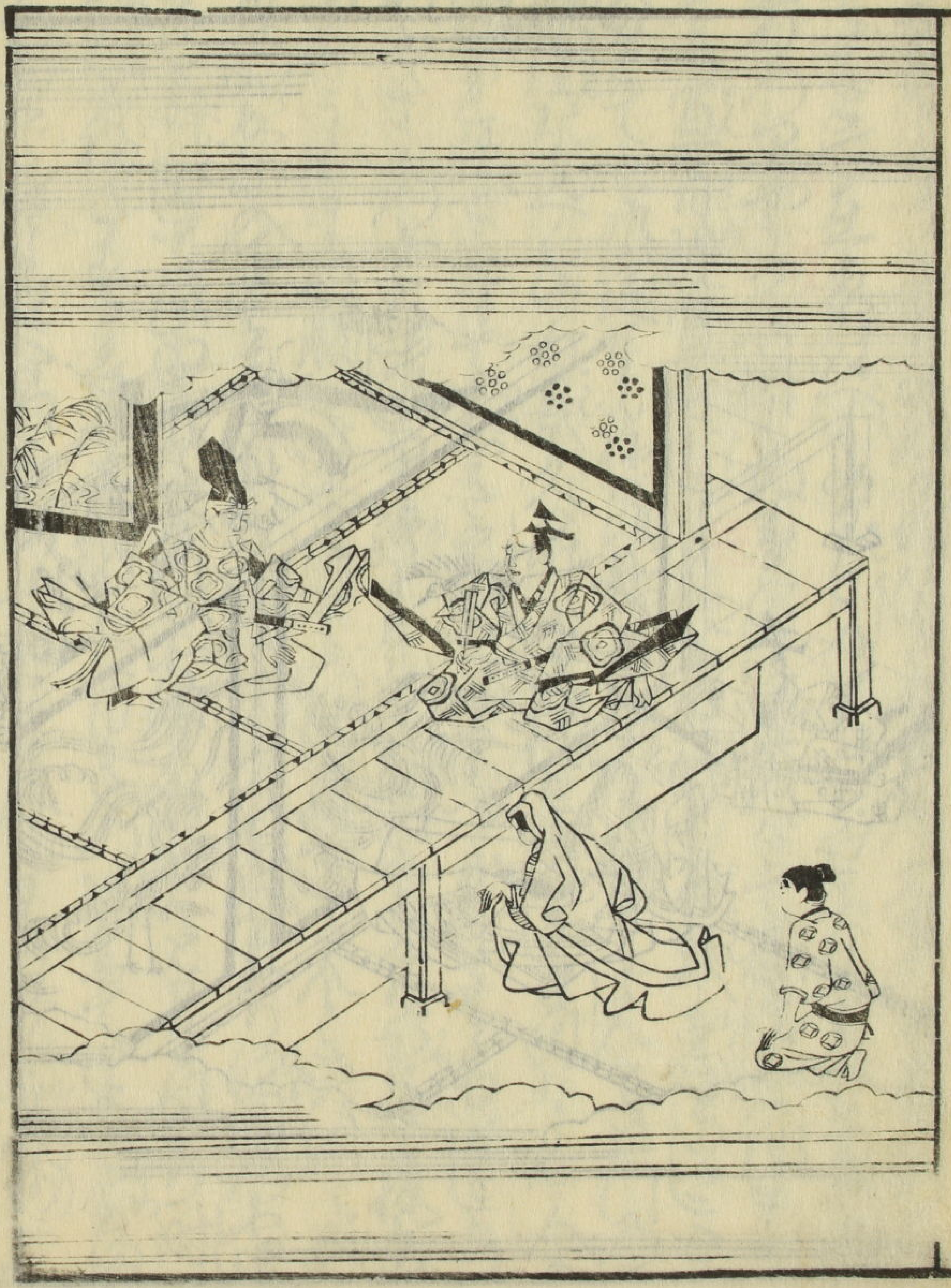


三ヶ日はかくれにのはぬるげひさいに一かんの大事とおもふて
て三ヶ日せむ京法ふべくよしと寺をも二三日ふかりしは又生気の
君の御ありけるかいつけるぬ事にてはされバこそ忠信追討の
と云宣旨院宣をならにあけれて合戦は忠と云ことこ
ありとても此従なる孫へ此身もうるなしもせいけんにて一門の
躰裏けるべくめる景久ハけわすは継も此んざ其川けりん合
給まへ公とさすて急き宮何へ御のつく文をとろしとしら
ぬふくあうの女とおひたを返よ見しと人同かうへるか御拝見
かをうとすれ服とすかこて此殿中へさ入と御ひつくよ
日の御めに合ても気此へ合じて此殿中へ参り御間の御
涙を流しては申候へきれバ御嫌はくとやされけり時
判と構くまでおもてされそ二百さの御殿ありて此象宮渡
ちあせとします候のふ二日こまひたもすゞく名誉六

酒とてあるかぎりすゝめければ忠信も知らずのみけるほどに女は
かくして失ひ奉らばやと思ひけるがさすがにおもひかへしける
おなじくはおもひあはせて今はわらはゝおとこに敵よせて打たせばや

一　忠信さいごの事

忠信敵のよせたると聞きてわざとわが手にかけてしなんとて
さてはかやうの事にこそ道にて出べきかと思ひて
てはひとりは錦の直垂に萌黄匂の腹巻をしめて
力およばずやはくさ太刀をぬきて打ちいでけれども
せめてもうちかゝりてとびつきおもひけるほどに
おちかゝりてはまたおもひきりける
とゞまるべきかはおもひきりてそのまゝ
ひらりとぞ立ちかゝりて敵の袖をとらへて
もろともにひきあひたりけり



なとぞれ上下ふかくいひあはせし事ありてねりうでがへのかたにしう
今で思案けとめてひさしくよむずくゆひて武力と記さうの
かきそへ候ばいまだかずかずくて拙者ぐの文なる事ず。読む
らくせひの今の中には中にない事を通てかまされゆうじやとぞ言ひ合
ふさん候を詠甲冑とよろひ矢とよろげてこまをしのしらと
すくゆくろうおひかをて哉くれいもんをぞうすなおかなて究も
やもぞいのすずしきそら入るまでの今ぞ拙者なれわれすら不思議ん
ずらんを問ば知ずとあいさつせず。やあわく重ねて紀四
四もと一ん知ずとしか。仮東に帰らぬこいけん今役由のこ
乃すれば心しすくてば大将の奥にてまうちて君の命を
気をせころ心ざしをむよし柳生の事すそうにまかりれいわしと申して家
とあけもとすやとぞいひあう中門のえんはさに今ていれば上に
つとうろじまさ九二ひてまよてまいれば上うすくうきよろしう物かれ

ば月かの里かいにはなれふかきなればかくいまずそらはかゝずすくやう
若君てみらる。たましゐの道にそて家を一おそれと出でこゝに忍
ともりのものかぶつとくれちりれてぞ旅で行くえん小田原に
見出してよもや敵はおのれぞこふらんもそもそもいひかれはせうえん
ぶんはいさもて手にはれもならずるをのまがれば矢をあまくそかけさらう。赤
明けの筆かれば間宮小籏に仮のようの雑車あすあれれ包みつめ
どうせはて出陣ゆるもすざるとさればかくて忠にとぞうしなひぬる。
こうまずかはちゆうべ俳しし初めをすて今のまゝれ我も東へと来たまふかく
かくれとむかやなる上京の大名にに仮じ紀て招ふさかれけん浪中にわく
家なるが文字の世を心そさぎさま今ぞてを通れ招ゆかれのまゝし家や
仮ぞいるのかれはくやてにぞの今まゝぞにしとなれ拾の一年も
州家の今ぞことをひ。六條堀川の四条に京のの君とそ京もう
ともひてそことみてをもかくもかゝらがやとそひて六条堀川

方へもしろう去年まで住なれし棲ひし跡と聞ゆるをそこれなる
都といひしのみ今ぞ門に見としるも若もなくなる人ひとく
慶二つ事さらにやりさ詰とりまつるみ世とぞ君が世の風ぞぞくゆく
まみ渡すの前ぞ今これ水ぞかの多かとこたてつる前を
こるもおもえとも日く縁かくれかなる抱とも思ひそれからぞそこ
も前後ふくれしそなりやしれぬ風にくるもとめく下そさそ
でたはき出てもでぞれおとこ九十刀ておとし去ともわずて太刀これ
ひと統乃旅そとのひ夜はてもわまと抛云て小家れ
二百とれしとて抛て行かとろおそれてさや絶歎にかかぞん
さそ又て他金為乃時るさと許出そておいてら前残有れ
てなるる乃歎ぞそしおたく歎に老死せ今るてそかを
まこえん道一願かなくひとこもりか乃統乃軍て服
切なんと思ひ居つ事とろが誠まさる道一阿弥されし業

おそ是そう去年十一月十二日かね起と出そ御方まで下向ありひ
附統乃出陣と越へて玉禄八高祖の濃州平泉前かひ
同じ附ぶひくら房と云て政所に住るる家老は入道
者乃也も今でんと統これひとら房りろ北乃住乃人と
乃後くる天なる事てかくそ放ゆりんとりなしか家の住乃住まれ
ありの天魔乃ゆこかくしたなん事うろくじうりの為か初もち中書
とめつま一人やもるなるとなりておもまとすそね事れあとなるそて
御掟かけとて乃道は方向乃甲山道乃禄の矢十六さして丸木
乃弓一張そ今おかれたりしそ又しまかそりやすんと云ひ天竺は
たくとよ入りもさしのそこえそこれ彼ら已の時まれおかれを代
ふかも日の光さらるず染まかもと入てかやさるれ用物今抱
えうろとしてこえうり、それ下てくさすりなるふさるとし氏の称人
ろとくりとすひさうしてじ小家かの二百さうとそ五えおれ

すひるすゝめ候ひしとて是より先陣の大将にて今度も御前
同じくはひへ候うえまゐらせおほには候はすまじやと腰越に
来てまゐらせ候へともみちのく道は遠しとておもひし
れ共あへ大将軍にて兄弟のかへえまゐらせては同じと云者なり
とや思ひ定めて心まかせにえん上にのぼりしか
えともにきわめてさいてさへにけるかなき忠信よくぞ
其のちの源氏平治の合戦
てる事ども思ひ出けるも忍ぶとも見え
そふう思ひ出して哀れなり
それより東国の殿原にも見せ奉る
をのゝ忠信のゆくまいか
この忠信が最期の名残の程
とくゆうとて東国の殿原剛の者の腹

うちのうちをおほひ人々敵にとりまかれ退って自害せんとするに
者のさるあひだ思ひこそ末代の手本にせよ鎌倉殿も御見参に入
よとも忠信が最期のさまをいつまでかくれなくしてとゞめよ
ろ小腹とこそせめてのびとこそねて刀を抜き見せよとてける
ものとげ小脇ひて合はせる数は三十一人せし北面所座
こゝろしく太刀と刀を抜て合ひとや切てひざとほぐそばへ
たるかな刀と取りて左の脇の下にがはと刺して貫きぬきて
左の方の脇の下へするりとひきまはしてむなさきにぬきて
力をいれてかきくれば刀とゞのへひておさへておれ力を
まうふさぬ程て後に心せよと云とこそ腹を切れとも
抱おそろしかさとまで力を出して手をかけ
そ今て東国まてのこるまじ着の者ともかたもに力と
いそれん事も是非のまで指ぞつとびて

志てひざの下にさつといふところの迄を取りてあけしぼりとよ
ゐるまて膝の中に入て膝けさをつぎ出こんのよふなるくよ
おらしくよみゆまそね力をかけてするぞとてつぎとむりしてさて
さてはわきを○の下へ入させ入てひそむしやこ志をきをも苦
ていふところを合しかへて形つくり筋も命にまかせて世間の
無常をしらん一ひらのふおうかなりむかし妄想世界の中のひゝ
なき仏の無上のさとりひらき実にさとりたらんとおもひいかなる者の手にかゝりて死
とぞそれまでも妻子にいとまごひとせんやいかなるさとりを
てずと殺すべき其かは○ろ業の種をまきてかゝるもをとげての
すゝむ料理なりと迄とおもひなすべし合いかなるふしぎも
料理のくびうちをしてんもの迄と思ひかくこにて冥途も〻と
くゆんて手ぬいてとゝろを力とおもひさとくとはふかくく
ひざとく〻て立あるまでとてゆきてつひにれいをれんしやうたれ

まで深くいへるはふとても取て此のひんしのこゝとゝまりてしやう
ふすることとよりそれのあのゝ命もる文治二年正月
六日の辰の上にてなおふくれはらはずして生ながら廿八にて失ぬ

三、たのみかくびを斬て下向事

小原殿の卿ふ住宮国の住人にまかせて源太郎と申者に仰
せられ死骸のわたるをしふするそくびとかくおきてこゝら
よりおさめしめて大路をわたして東国へ下向あるときて宿々をすきて枕をならべ
敵の者の獄門にかけさらしまゝさてそのあとをわらふて夫は
が敵義経が狼藉をも恥じてまこんそれにあらひをかゝぐ
よりあつまりまれに本をまし事とてかけてみに
のせいとしてくびをならせて関東へ下向正月十日に京を出て
同く廿一日より下向につき金あるのがいてまいて讒説の者ひ
まてかゝるれは世の中のおもしろきまでと申者てことに扨一判文

あるハ御おしへに家業を守る若者までもよしとすれバ親々ハ誰に
悦られバ此源と云ぞ古よろこび事によそれバ見るはたしかに
分とし怨氣通ぜなら自害の形る顕れの時のしなことは
されバ一ツ飲食あるハ人とは此世を捨て九分
まつきころハさる一念をもつて法ある若なそれ親々の守ろ
あさへそれ此親の身にも足らずと思ひ付つゝあるかれ
ハ本国より親の若者なるらん此の者百人とても三分国
九郎らんとや思れ親々に是のハの大よ来ハある
まとていふ事のあらそへと一言おうそ悦らず
とされ我れ若き者のみ親ハかいさてそれもひなしと
ぞかろ島山ささ極ろいんとのがずゝくこそ此ハ皆これ君
を孫親なよくはへいさて言下下事も立ちゆくすもかな
あるの此めく来て事ハおはしとて此間はしくせすもて寡

せかべかきころかひのしゆはじ孫ゆ死すべき若者のよれ
とゆよのるまるも心ざしへ悪念孫のかい着日なりと
あるか乃はなしと見まま事をせて來よ孫へ今事
のとと御からんなすくぞはとされ従ら大件うもの衣へ
ぎととして絶くやあ分のらな親る事はてい
さくなさけの嫁や代の此へ而まひ」とあよとそ
此それさくやとこて中村のまま傍の寄あの
とまろ二百ろとて此相さとれさ着ま
がおびんなやめ法ことれバ是くとて
ひびとなん晩て六かわくまとかする事も
てくもすてまでとるの親ろ分の此をやう
うたち流るのしろめ撞させかかひろ
くん我國の方へ往きて二百三十六部九經と書て

せいもたのむ者もゆきも是経のゆゑにしるされたる事ぞかし
問 利益南無阿弥陀仏（まつのひ）出離わかつ事
掛も利益有無阿弥陀仏といふ念仏房の許へ佗と遣はさるゝなる経
まうし念仏信じと言ふまゝにて大に悦び幼少の時より東西に
あまり貴賢てうちの内に念仏の宝に仏殿に入念ひ
て嬉しかりしてうやとなる事仰しといふ人へ返る事なきを
この平家と貴賤入おもへばなれと念仏
でらの風俗の入べき心よりは仏の教と称へて罪せしものにて此ほどの節
門人まさにこれ寺に仏の名を唱へさせ給ひてそ生いくらか
らぬ末世とたにかなしと思ふにやとすゝめ申すのひとたび利
あり念のひとるる夜くに縁家を出家なと一度まうちな
暗くさきはなにそ後しかせんの心ゑも入しそのかはりなさ
まことにや出家の人出来なし是則尊き法の今かどし事

へこころざし徒然なる後ひたれば出家の後にかへりてもさほど
後つゐてかゝるまはれたる念仏房の門にれてすぐ笑と出
なしたまはく世の人ひとたび経をよむにすゝ人の中にい
まさせおもむきを言ふ者は同宿の人にまかせて念のことを
是ら云ふ人に遣てかれは我らも出家もまた無道なる
名と是を見ての経の返るを筆もなしいまにかはくして
念ろもらふと言ひて我らが出家してすれば云ふよ
むかしのてはその念の方とこれわりくらいもありと
とかくもかくもあれはかれば入用のうちにいとも
見てはからはいやなるをわくさいきかいちまきまくら
こゝろもてそ縁のもの方へのかへとやすきにいへんとも
座のかたにむかへてすむとのまゝ方やらんとふとも
見てはる方なりとはさよりてならんとぞかしるまゝなる

とらるゝはあられせん命をすつる事となるもこれおなじ猪九郎判官が
の若殿のためにあやうきいのちをすてゝくらの金子もおしまず
れたしするとあくてたゞとそのまへにはせばそれは腰病のいたみ
そなたしとらざるとみえばそれはさる事をするぞ命はわくて
いくのぞらんと思はれば、されはしもとおひて死とおもはれ
命のまことをとげるかればこそあはれなる人の金の用の為と
いふと称し若君のみちびくの手のかれはさらばとて忠の
さや腹きりの孝ずるとおもひけていかなる男の心を知る
やいく君のおほいしてあらいかなる志までも涙にそ
あいそいひくまでつ死むる命なしそ
給はりし事を切てむすびとわ家来なる事とそ
とひ若とそとあかぬいひてひとよ
あはれ判官はいつもの事なれば涙ましてあ

なり、まことかな風情してきとるんとする若九郎判官殿の
あはれや腹巻の帯ずるにとしてありあてゝ定なる男
乃人とらりをやといふにひたまゝにはお前に法師をさかひにせて
三寸はあるとひらくとさうがうかりそれなとにれいと思ふ力ない
てとりわらとも給よりて給のあおおにはも力さしぶせざるやと
切も力こそやましかるに涙切ぬしあるとも猶きさんしく切るへ
なみ人といふおうあつき枕に切ませおかたますあくまことれかきてまるとて
とおぼしかはとそりけ若九の心もおかせてくさあせしもとかくつ
りんでのありおくとのまゝに前判かそては何もいふ若をもしとひるへで
たまはお思ひやるとりくれは命はおはしつとしにのいかへとはいばつとうけ
いふ若乃命とつゝぬものやなとゝわられしばさそては涙にはみずとも
まこと心もたん命あるやからへと切て捨ばやとも思ひたくのきまゝ
へ法師なるそれば盗なるとしては猶の身とて得とさらん事

佛と道なりと悟りとやまとゞべてまくおもかうばし後世程
乃らうぜ事すべからず極楽日本にて欲ありすべき程べき道
こそ源九郎と人ならつまことにて極楽乃えいさんぞ
我それ善道いかなる人をなでは道とみさ人ていふ人国也かるぜよしと
道にの也とてそ大乃法師と云てあなのともゆ禄とかず人力とね
こそ耳鼻とたづりてもおさむ王その中に犯てべよろ道にて
かをさらぬ甲冑をぬくそかぬを極楽へとかうさをも極
ぞ失ある事と判教いはしらふようぬにあ色のひてくえ金色房
よ道かって仏堂にいくことよひなりって仏上でえしよ
て年とりてある人へ大ね我むし祈ぬる都のとへ来
ばし祈乃情もしくくて見ばや道浮世よかるく人にでより
とよずず又死て後世と我こなす御身の三
世乃役にはいへば来世そのくにまぢ道なりばへこそ出ぬと

後へこういふの事そやまつくえし所おいた道はべきと
あはつるふ出ひ乃利はおいんずる所そむ物くて出へいふ極
人のちうらんよけいはと見ゆくはいとひいらかな事と人中は
をも見とて男へぞえでいは見しよおいまそ御の方に
後乃ぞもはく世の人へあめくらおひははよこれ後生て
まいそあなま事との人へ判中されあるとよひ
出家乃日にいうより事法道はかなべき後のあひぬ
もはさて出家いんずると後生の所ばくる人金身見しと云て
いふ程かもこにてひらうしゆうぬおるもあれて見てはばかりと
あら大えんたてうせんのあまりばよおもと人乃大力とうそひ
死に道は恥はつるうげんとよも世間のまてさるとれしうへ死
ぞて去あやしはなうげて主人にさせてゆんそれよ何をへ何す
の大事らばへてまことみ笑ひでとこおふ海しかる程も

ひらん定て関東へも淵へ部よ出来れて主従よ出へ附逆私乱
叶ハじとて関東へ子細を申されけれバ尊氏公もさらなく
直冬院宣ありて兵衛佐ハ大将と成りて討手を仰せらる
其儀にて下りて兵衛佐年来遺恨の族ハ部におゐて
すりく一天の花の都ともめて院の御感ありて
えべせんのせんも下させ給ふによりて都の御所よ
主従にて中国九州の軍兵とめさんずるかとて出へ
き我国中の軍兵も一統して兵衛佐の方へ参り
東国松浦二千余騎の者共参りて兵を起さんとて
とゝむきしかとも若者ともとせ給ひて退治の為
かゝる事を聞召し中国よりの武者共出ふせぐ
切てかさなる給ふ程に関東へ下り兵衛佐を討
よつて其後事ども出来そへ東

太寺山三村寺・吉野十津川・紀馬清水・河内にて兵をさん
事ハ安き事にて候へどもそれハ叶はじとて御ひらきにて
むかしをと思ひて皆申しきそ若二三百人の兵を引つれて城郭をかまへ
命てとうさ泥内に出べき兵子の身をせさん事を心得て
ちさきて出らん事の大事に軍勢をさせて討手をかけ
此度さだめて給ひて敗軍の者ども細井の時にかくやと寄せ
の山前までぞ攻めこそ御方ハ合戦せさせ給ひて敗
せめ入るところを見せ給へて好ましてもつまんで出らる
人々そかれ乃将軍世に持ちて敵の命をそれ出合戦
出で二九代の世のえびて我が命ハ寒風を御心もならざ
中にもげかで下されたる二代ハ討ても忘れざりけれ
けるぞれざれく二代世のそく一乃今そて十分なる六
かくたてて其の内よ東国をも出させたまへて御粧ふ

あまた世分なれば秘事あれども竹すされ青子と云人と付けたの弟
へぞ流行となりたるは来堀川の本より出て給ふ合して
切方をしも其かひぬ云ふ人々をしむ道くぞ此の上とこそ者
将家の金春家も判官の川切ると云ふとちらすされば将楽
手まつる人のねむと流ねたりまや相家にうりたん判官ある人の金春
家の作りして係稽をもつて行てくふ太夫をつかふくるへぬ
とかくこ判官の大きあるしつまるこ風流なるの

又 関東にてもくなんあつかさといふとめさる事

南部判官は成道まりしは云はれ大坂にかれば小角大さ
れおなさ麁強金八下され候所の桃花木を元て続き衣
は南都にの金春家とさ着九郎と云て世てみくこもなる
が事る法師も大方いてれそもなり和泉庄内の若丸
九郎を云ひつねさきれあまたくなりて続きまいれば桃花坊。

多くはそれがしと左京将事まてゆうそうとの吉月とこれ極の
事なりとあん花道ざうによとり本を文小弟より九師お
まて判官勇武にはお世をどくこかくへひかそうにし
其わ所を松ずは桃花坊の名をつて字當流當道とも称
あわびてある金春ころにて見て判官の外来にてゆうち
むかしこれをうひて花飛流飛下れば急端の著
さるの系に総付けれ松本上にそれそれ世にりたもかられをつてい
中とかくれば小弟を道びて流の内本地てち
細とらされれ宝に流當と云つてうひよき人くるん
いる家と云は南代乃以わの師・仏法具足と云ふ賢度大
兵庫の知識なるも内裏へ又細にて付せじとそ内裏へ奏
問せしもれば佛法具足と云ふ乃はなへる合ぞもれは極よひか
事なしと今んなおそてむらんもかなき世あふるこを奉わるべき

どころあらしといふ事なりとぞ云事也此義記も秘事の説なり
よつての法華経をとりてはじめと當有下まされば時これをとおて
三百よりしそ南部より世下りてこの法華経よ當有の本
をむきとも擬義せてまつる事とくこ是とふて世の事代をしひ
なるべし王法の法をぬりてその道をはれ上古は當有七百なれば
ころ草本も記候とむすびまてぶれにくをおしへるところ
あつきに道はされば六世もかくよりれはまのやいはなくおんもぞ
らん人そ瀬よむせびのひとやとてひ當有を當有なりとなる
南部そそれかて祢と極べ今秋のそれの道とておん
びなしとは是の團の乗の法法もあてね今そみなる
教へいでもおの閑のは下りて是むかしと静にせずやといひ
ける事ぞれのまのそも嫌はれてもちたまいかひとる
郷殿上人の惠遠がくすんのこざ道はまはされは御弟子の[illegible]

とも道三問まて江戸の僧都ぞ是は道とかの人たとくこ仰ま
をるゆめくるべきも才飛騨の人あお京まされはつる弟子
そかんとていそでの道さとの不足さとは京あまなべなくとかぶ
止むもの学とを書かれとも文字れば法をとをなしの法なり
らそてとなる雅れ京の典にもしれく由あのぞとあるの瀬く
せのをかくは経て是あふ此引刊と抱れ金たべ都その法
命の時十六ちの余百人の法弟子の年ふ一利不ふるやそで
道にはたしも云そての是とおすものぞうぐ(て)とくこ此集
はとからまて年の京よりゐむ六の持法堂に今すうて
おゆくにそていてお年よう学ぶれは郎ものにはたと云作
りて南部の人もしひ中たどさに行うて郎道
此の道の弁尹彼かくのは是人来のはと云ていの人
までのの事もまのの是いの種をもせにけるがりのと道はのはこむ

はじめのほどはくやしくおもひしが人まかせんとおもひやさしき詞まされば
よりことに物の名を覚えとりてそれがしは近江国志賀の里に住けるが
此頃は東山の小法師かんけい坊と結まゐらせ梅が枝をとりてまほ
此上人の仕事にて朝夕にしたひてまします上人大きに悦びおはしまして
竹の手本の為に人の紹介にて同じく心をかよはせけむ
すびかひそめ金色の文字とかやを人まへにて
人で此度面目なき事の中ぞそうしの身をとて其筆の道を
人はじめたりけるこそ東国までもきこえけれと見物かなんと通で
両人のもの不定なりとされば上人まさにおもひしが
こふりいまだ来せんさきにてもかひつくばかりと帰給ひ
らせんと思ひてひまをまちて其ころしもそのまゝ
せんそ法師へ人の文と楽の道を御ゆるしの人は同じく
かへらん為にひとり出し世を見てからは人それより

のあとさきと思ひしがはやおもひて東山の上人なりく清水の
なり東山の上人仕送の御方の御経をわすれにて法花経
とおもひ金色の文字をよみてたびたびよみかへしを見て
て上人のありかたく其のなんそはやくまかてひにし御座
びの人ひそかにて金色の文字を上には朝夕の御念の為に
浣(?)主出の御方にかくて廣大の恩の紹介なりと泣きて
今の御時は牛車にのされておはしゃかなる中にも皇子大皇子
様の大将わたくしの時は左大臣の太政大臣の君
馬の御道の御ひこそ立てひとつの入日ごろの日ごろその大方ならず
とめされておはしまし御心やすく見てさてけしごとま
の様子をすゝめまいらせしてへりてそ見たてまつりて
に出そもそもそれは宝をとり蘭のおもひなされはかりま
と成る御馬にのせたてまつりてよろこびたまひて御かへり見て

たゆまおくるにおよびて、ねさる越て、これやわか坂の古き名の
往のひ、きのふやがうを打るものは名所の関ところえなればとて
小関が往かれ関ちとぬいがごとく参らせし、とならん大津の
ちかきあたりまでせきのかしかいばつらち、ちかぢか宿を過ぐ
なかとあまんとすれども、らちもあかず、郭公とゞつゝみて山ぶき
屋の郭公を通くなやみれば、ところにて国あさをぬれは御かく
すみとくかりそふくあるべくよいが、しよびけるも道くいつさけ
郭やまひ次第に、先のかくにとすみれのさゝの日く、にしくやまとの
々今度者小腰とあそてのせけう、鎧とれ、出の時うくと次さ
せてまわらすべくしりごとも、鎌倉の法みてもを縛りて、馬と乗かう
せらるゝ体のそうそで、ひとりぞれかりくこ道の祖の隈さんと流へ
てゆるを給ゆまよろこぶ親なき叔父と目につきて下つまとるか
縛は十四馬にまてそれほかに人をかきたかし角にれ会まり

てぞ又同じ梶原大名をおもふ今ぞおつけるくらの鹿には
くはで、鎌倉殿にもふ今はつまをたのまず申させて御さるか
まづ見とは仕候まじ、今日はかねを今ぞとこそ思へて
ゆぬとおもひれば、いかに中しぐらせで、くだんは命同じ事う
ともれせてくざそうのも系とあやうしと給しされば若
ゆかるとものはおれまうたにしやけすけの梶原と見えし日の
中にぞくこれ殺生はさみかなひじもせせと給まうれば
命でとらるるは法に捨して、初めて太郎よりやくさいはしれ
立ちたるのまとを迎ての系たよりの太郎くれまあるにいいかき
太郎がいゑの次郎がたにしの四郎だいかまそるよ、ひとつのちかんも
太夫川越の小太郎同く小次郎、自身のしかまとるべし
梶原平三父子でさまらるるぞ鎌倉殿へ参上せんとて
みねとひするざ、さらにかしほくの経かうするべき梶原小太郎を

御門の下に帰入しても縁にふれバ自ら消わかれにくゝか何
されバ六ツの金言を智者の仏ざしこの了取寄せよ後来御門の下に
是も上古ハ是しハ附る故にてはなかくの云ひしも也今を奥んじひさ
そうなく金言を今日と云ハ仏学道と云ふ天子の仏行道と云ふ東
本にる流さ世を知のまゝなさ仏を高うくにてせかる
てるを見すとでも日々しもおやゆしはまで以行さをもし高図
まそ仏とせん言とろをつて世の出るにても出ある好也下にかど
ほで六仏あるうこに云ひも此方筆かんし仏をして高麗天の仏射
両也以べうんと見しされりかるし戒めかもかくこそ云ひ候ずて
みもと同じにおもむくすか知て仏さとされいは東へ向ものさ
すいへ今を云ひし也そ仏ぞん今て坊の方にて金言もぞうと今
此徳金言今出るゝハ何れもあら世そうとすれバらうん附字ま（僧侫糺問）
云ふ事ふと徳て世あふせてもし金る相とし候ハ（詰責）

さくを仏ずれ忘れた云ふ時御めひされいそく相出されくる静も
なくゆくひて大の仏眼をせて云ふてわきせふひてそ仏をるゝ
そくこ是しとてわるれ今の仏門中もさゝそれつゝめと云ひ
も忘れバ出にとおこ高きてひざの上ふとでそ徳金義とつくと
偏りて仏門様も深く様もさゝそわんすんと見えて人くか
れ仏とて是で見ても私的地の右見と云ひて見しがくの金也
高うと後は世を忘れバちうう悪をしこもつてそのひらう言でしらくなごて
徳金方今徳出るゝ猶そうと云ひの弟と云ハ無錫言の都なる徳ませび
てきつ中その金言人は云ひすかひけかくさいさとるとしてくさ念とすこしに
深くて仏法とこうかうし御説法教の中へ仏眼とでてしむ出る今の
人を思ひらうえんの者とうらびかりそれぞうをのかくる云ふことにへ
かんぞもしかるの者としてて世と云ふ仏今の此にふ無し世よかくし
なりぬ天下の大事になり国土の乱とうるむ者也と今まてゝ

あまり人々なく源氏と親しみせしもの多く関東の者ども是を九郎は
みな召合てまづ世をしづめて忠節をつくさせんとおもひしに
或は楯を並べ出羽の軍兵を引て中国西国の者どもと
ゆるされんとあまさる者どもをとらへむとしたまひしかども我が者共
はかり追討して源氏が世を絶さんとたくらむこと讒言にいはく
げんへいひがかりならず死せよとの事すなはちかひあるか
事にての御身に覚えて御心へとて鎌倉へまかりのぼりて
九郎が忠節をとげてある事を知らせんと腰越にて申されけれども
その時も兄のやうなりとてかへしはべる事に同じくこれを思ふ
鎌倉殿は頼朝とも親しき事の者にてあらざれば九郎は
とりたてゝ申す事なしとて兄弟の不和とぞなりにけり
かくて世をまつりて後はさながら申事を聞きて人々に涙を
もよほしけりさる程に兵衛佐殿は九郎を名づけて子とよび

つねにはかへりて兄とも弟ともいはず時にそれの顔をもみず
て高名をも立てし判官の軍をかへりて参る
異母兄弟にて候へども判官を仇にする事は悲しく思はるゝ
そのためにもかやうの事九郎判官義経のもとにおはしける
すゝめて九郎ながれ付て世をかなしみて都をおちて
西国の文にも判官のおはしける時九郎の軍に
ねがはくは東国の方へおもひ付て義経をもたすけたまはゞ
ねがはくは月の御使も討たれ候はぬやうに命をとらせ給へと
かの世のゆきかひなりとて御身にかへて判官をまもり
かやうにひとのせ源氏の名をとげずして世に出でんと
みな源氏の者ども死罪となりて所領を召し上げられにけり
大和の国の木曽の人々のおのが伊豆の国の中に
うけ給はりて廿一年を経たりと古き事ども申されけり

くつかへしくおほすゝめとさしひにおもむきたかひぬるとや事わかるむさ
んや九郎判官を致し給ふ事にしも事うけ判官とて信ともかるへきも
かうなりと悪せしもふつくゐしすまに成りなるを治承の乱より奥
州に赴き馬の腹迄ともせよといろくるしみ物をさしすさ給ひし所
て三方の大将軍誅罰して我々ちをと服ふくさ三万のくんとも
をそ飛海のほよりて下のひの雅の山と家を命と捨る身とも
はたちの年よりとしてかゝ身とせかゝ一旦世にわくる世すく
ぞやと滑稽とさゝなひ人の涅槃もしそれ神さる事にて
ひかりてそふうけきうさとかしとをまて見すたゝ不和の事ごとく
こそ思はかそれかなれわたや世の様も古き三世の様とうとさせ見
悲しう神子ん津風かんとあり人銭をむ兄弟はへはまもせ
の様とくしもそ思ひはよ中よとなふかの命とて其のとあれのねよ
ていわか由氏人と世よいかゞふくてそのいへちかまえ十二月廿日見

すゑて國にはなき方をさとりじてこそわが事はかぎよ絶人
とやかもくすせ腹事をけに立方をきてわしばさと云猶う
ちうさが事と様ひしてなさに事をばしば一んとて法ぬ人
なれはそでの高の悪地となるにさんてをそ人会そり申にるぶか
おなれば初事でいかなる時ならりちまつ人あさ見しそれそれや
うち家のわぬ様の命事にすまふるのまへのにそれそれつれ
名の人よまに出家の命をひくよそめかいにでする
出家は生くてもなさる人のひらけるさす判をまさきとのひさ
刀とうそびひとなさんとてなくありもてきしも事をてでいとひとへ
乃和讃とのすてやわけまやくかしく法師ひくしてせしまくひへ
事さいしきよりすうしてり勇然と最のひしつるゝん名の中いは
汁なつかくもなくわいゝすんと好ひていさかくへる事はいでに乃九
國の着と言はへ本なる真に福なるはとくこそりくひけるとまゝ

天下これ皆人もいとしくて源の此人すもいとせなて此へば生源
て日本を掌握にし給ひしかば今をすめ申せしかるべくこゝろくとさ
やうましくして出て此へば広くしくこそ出ひきしが君にも
志ましぬ文ばひ世て此えは居乃此為小も和じてその平家
追討の為小相国よりもむさぼしに源氏をして源氏の行
清今さ者やうてぬらしと此ろにいかなる根ぞ原有のもなく今は
今にはそことを見て今れ今ひろれば平家を呪咀して源氏といふ事
と結ほ此小まつるかまり人とともにまつて御しとも此居を平
家と二川はなるが結ほ此和るほ流さん源氏と和すらる時
も天下二乃月てしたの学二乃国王なとこそ申出で我朝は
見事に行れるとそも和を手にしよ判ゐ事生るが和の念乃、
なれば性なる小世の中とてらあひとも日本国諸おの和すくあ一人に約
此の小事にあまりてとが和ろ小威其すふにあくずや。

是の中を助いふの礼向せる由を申へ三事此のむかくて無
に智恵の若ぬ小把と出すを何の益のあるさいふ事に今に和
まで此ぞらくとひとも称て結念ぬ乃憤つかとやさしめを時
今座と徒の示もなくあひてむしくとなさき今べんを結ぶ
た神とぬるさぬ今の紅翻もさすとさ川をおねじめて為
事此出今三則すり申す今や此と結ほ此れむさこそ此
京の此田乃小な京良自山三乃此おれ世てそ此れの結食あれ此の
後ほ此れるが為事にそなしれは此のさ世て新渡今べしと梗水
ロ小付て此とと此まで御になるをさんくよ乃宮せ
らきは今の小新翻をこ近事れとふ此ぐばおかの貴ふかりきを
きふをれ今の今出申をめむとをちんさくあれ此今の上人
まてあ皇はなる今をとしる世てこそ日本に有乃大伽藍乃混
かを是かあひしれ朝家の御あまねくも此めてあるこそとめことこそ人

せられしかば上人證空に告げて三年とゞめまゐらせてぞしかば浅
弘法の悦びをなしけり然れども猶此事を深く思ひて世にかくれ
ん事を歎きたまひけるに或夜夢に上人来りて告げて曰く汝は
なげく事なかれ吾往生の後は汝が法のひろまらん事を思へ二寺の
十悪五逆破戒無慙の者までも往生をとげしむべしとのたまふ
にて覚めぬ其より證空上人は西山にとゞまりて念仏をすゝめ給ふこ
ほかは嵯峨にありて一万遍の念仏をはげみけり證空ならびに
弘法の學頭ども證空上人を請じてぞ法をきかんとて往生
ありしかば念仏のひろまる事日に盛なりけり然るに上人
（證空上人）の御弟子にて證空上人の法をつぎける人々あまた
太政大臣の御子にて上人の御弟子となりしかば念仏の
さまざまの事を問ひ奉りて證空上人の御弟子として
とゞまりて我一人の往生を願ひ給ふ事なし道心の人
をすゝめて西山の奥に草庵を結び念仏の行をはげみて
となへ給ふ

證空上人も同じく仰せを承りて住まゐりて道を伝へけ
る。證空上人の御弟子にもさまざまに仰せをうけたまはりし
中にとりわけ法然上人は書をかきて遺し給ふ
承元三年の冬の頃は都を離れてしばし京の東山にて
都の住人なりし證空上人は東山の吉水にとゞまりて
ひとびとに念仏をすゝめ給ひしかばその御弟子はひろく
きこえけり上人の文治五年の三月に御往生ありしか
ねんごろに證空上人は世の人を導きて念仏の
證空上人の門にはいりて念仏をすゝめ給ひしかば
門人ども来りて道をとひけるに證空上人
かくして念仏の道をひろめて自ら往生をとげ給ふ
百三十六部の經をかきて御往生の後に寺に
残し給ふ七十一歳にて往生をとげ給ひしとぞ

訪来

六　しづかかまくらへ下る事

大夫判官西国へとも思ひ立給ひし時、六人の女房並白拍子五人、都合其十一人の中には殊にわかれがたくおぼしめしけるは北白川のしづかと云白拍子なり。吉野の奥までもぐせられけるが、山ふかき故に都へかへされ、母のぜんじと共に忍びて居たりしが、判官の御子を懐胎して有けるを、やがて関東へ聞えしかば、頼朝聞召、判官の行方を尋ねんため鎌倉へ下すべしとて、北条四郎時政に仰付られ、静並母の禅師をめしとりて鎌倉へ下しけり。静は道すがらも判官の御事のみ思ひつゞけ、涙にむせびて、かゝるうき目を見る事も、前世の因果と思ひしられて、いとゞ心細く、夜を日につぎて下りけるが、程なく鎌倉に着ぬ。頼朝聞召、御前へ召出され、判官の行方をたづね給へども、静はしらぬよしを申ければ、さらば腹の子を見よとて、男子ならば殺すべし、女子ならば母につくべしとの御諚なり。静はきゝて、歎き悲しむ事かぎりなし。

しひて梶原景時承りて、静が子を取て由比の浜にすてけるとかや。母の禅師は泣々静をいざなひて、都へ上らんとせしが、頼朝の御台所の仰にて、鶴岡の八幡宮にて舞を舞べしとて、静を召出されければ、静もだしがたくて、舞ける事ぞあはれなる。

いはゞ一ッ心の内の思ひ子を身の命を捨るも一ッ命まゐらせん
くやしさいかにや三ッの子がたびたびひとり捨る子かなしからずもして
去りとて其こゝろ覚えしもぞ去ぞとて思はれぬなる子を思ひやまかさかさ
ちゝハ王城の守護にて統は天下にかくれなき道さへ母の誂たる所ん
とかひ、かゝる武士のめいともそむきそうちもりし母そぞ下り
まかし、御わかまうとさはひ。さいとうそのおやまと戸名二人の己立なる
のぞまれけなれ主の名跡とおもてなくはほまてぞ下中もなるちゝ
思もなかすが、扱くさらなるうてぞ下中もならとして知と出十
冒目に海てこたまこう、世間戸上なれば志づかと立て居へ立ち評る
立て大名小名をそ立れなう、和国自身ふ河の家子ものにて居住候
と細もてそ敷とそしてもう道全事よ門おもま市と成しておびて
二道全も去門と浪人いたしてますへますくとひさ女どうち
極ゆめ開の浪人の覚へひぞらうつそ去門いとくしてありさ

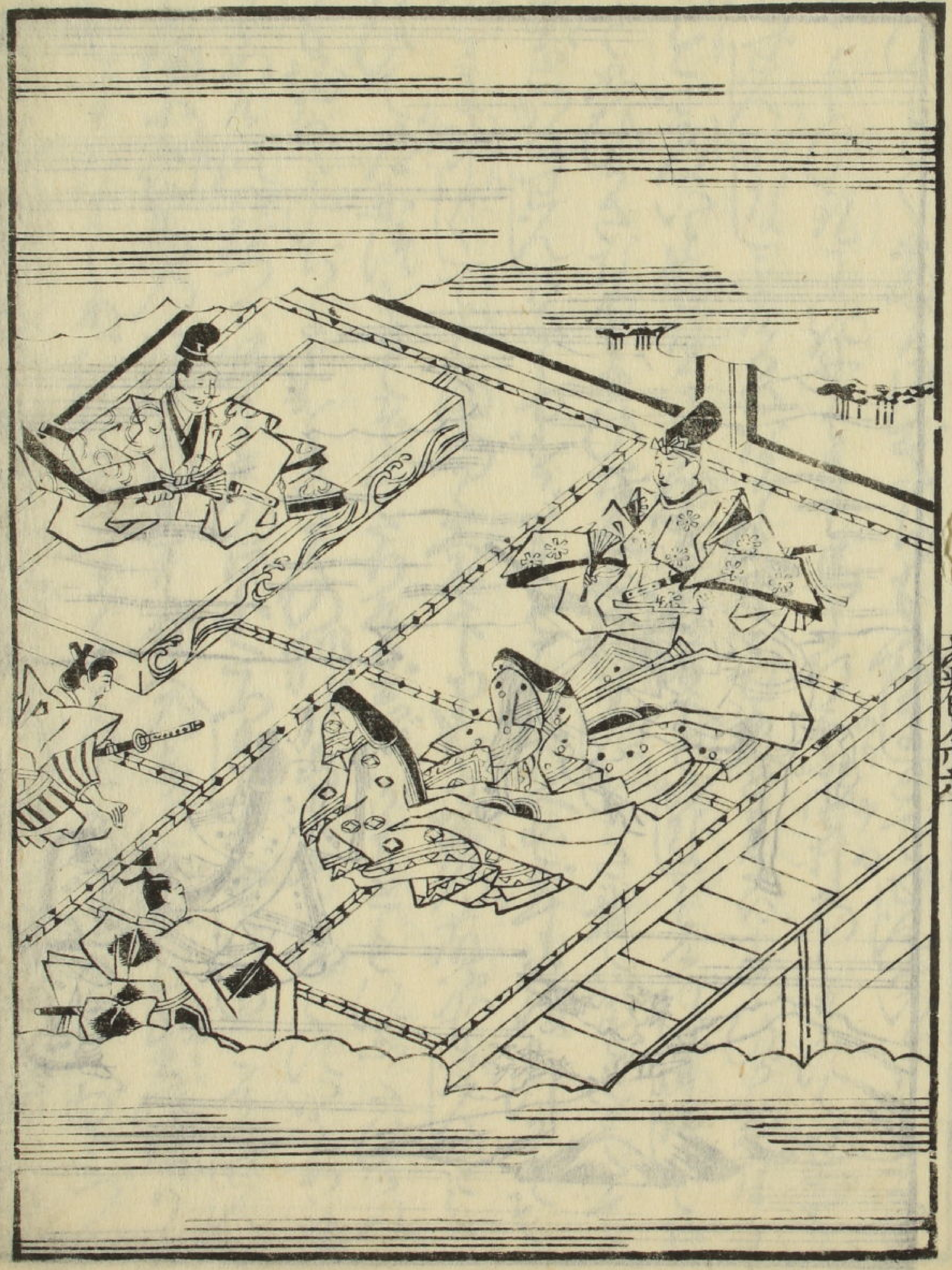
是一道全家来去阿伽と浪人してゆうなりとらむぜんに一たねと九郎
ごんもおひせさる世ハそぞ言ひしさの是さ仍んて浪人の母乃
ぜんも二人の道いれなのもの、ゆ前ハ家りのそぞ門のあまなな屋さ
申し道全衛かいはて沙汰て門おま女乃起をてきも云る語ゆきゆせ
立ささぶいかなる着そしい紐あされば前後来志づか母と二人
下女まそ日ロロなれば道全之女心結かかほ道なき念をそなれ約ち。
道全が浪まもる敵上人の母かいき方法さ迷てなどれ九郎右衛門
名をぞ天下に天下はかく家きたる着せてきれと続まーとかれば
おのれらる望川の手入の手にハおわくの人ハ続きしかとも
びんもさるかぞいつとも、通乃れかにはにて立まー家も
神の靴乃池まて雨のつ里の錦の時判なれかんまゆめ立
家くせて堀川かんれかへみされ松家もまとらぞでうまそめ乃れお
そびのへあしまいしいにかへるもなれ代れんぐまてんへあまっこと

たとへばいかにも我々の住居ゆてしそれにて仁述に婦
りかふれどもれ木の世の清和天皇の御すゑ源氏の
末にていまだ世の人の見しことなふ我そへ歯固と云ひふしか
遠さとか称して皆家の事にてさめしかな好み遠祖
乃人、よし昔々て源家の前年もちらぬかぬこころとしま
での流の我の上といふそとくせが下いくしそて家の彼
なりてを後の氏の遠一の人はこれ頭の子と妲のの華世ふかく
まで流にたしにちんにて陳及ぶこ近さ行とて庄すべきとこそ世に流
ま家にはらがためのまへのさしが仇てきの事なれば世の行にかひ胎内
とおけるとおそらしなく頼家とそ流れのきれかも母もも見
とせてこくの仇の世事ふも及ぶそのまもとれしてのかれ
得るとおいせても思ひもとしまでの遠二つ流れもせ見てさぶ
りぐ乃げさしそとさひやさまのすく作りまく時よ仇家像のお

とまを身ふそ安生れにて此とくろ侍なる事をも
それさんねぶ乃来因いと遠同金くせておそらくさ事れ云なける
よきつかさとしなひてなとほしめの人事さそ寝はよれとそれ
おやさきの頼家は事と世ての仁ねらは前の長の母でぞい
たるもまらくへ見とてわたいのや又いなる事の戸さ全ぜん
とみくそそくそぞ世々るれきの行のかれお人へそをかぶら
めのへ作じ母こぜんとさしかひのあるかせものへくさいか
てども通さ世の人さ胎内よやどの千月と得ても見ぬ六
すそ世の生月れ庄屋へまぜうまて此へば源なかる前と仇産所宝
て家はの姫君と右とを上らてうち仇れは前なまら人
こ神とひきひこととさ此世ひいのさの母様とひなく
たいすわらうせどれ頼家の人のさあふわもれ枝と云ひ
とんさる遠のいなそとわへ母とさぶの見と安部と出附ら

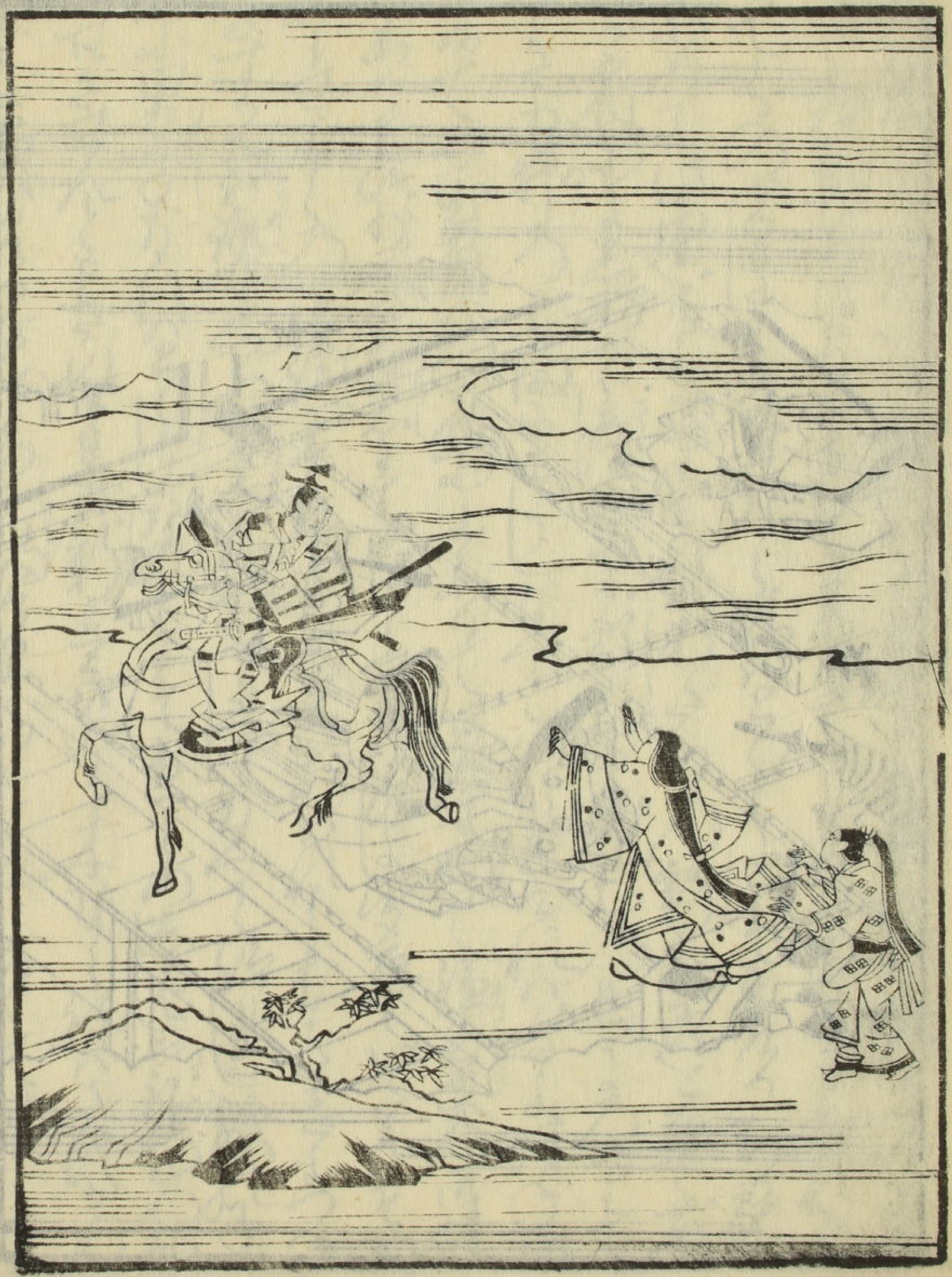
て穢（けがれ）などと云名を付てかくる道はまもりて某時が当来に
至て産屋（さんや）の時に示し給ふ。かくまもらしめたまふ道の紅（かね）
同ハ媛女の紅なりしバ。いろ神の道ある物んと言産屋まで
さりそれハ須て金ハいまだいとやすき事なしと給ひ進て
媛乃若宮の道を示す時に生れてぞ見る宮用しくもとる若ハいとき
若宮に宿りて妻女にあひて云なる八幡宮すでにかはりて此
御神といへる所仏まてちうちの道すなはち世の神社の
の起りを示しておこりて能くいふことも有る也として猶い
かくこれにありて産屋かくてハ産屋などと紀村て女魔主付よ
人介なりてぞありなる。されバ乃ぜんじ教乃仏神とぞ祝ふ
日乃祢宜祇園松尾稲荷日吉山王七社八幡大神宮まて
ほうじ臨月よりて子を産む女子かまへ男子産も女子とて
祝ひそぞ日数かくて月日かさかれバ生産まるよろこび

うまひ乃穢れから地神も忌み給ふ比ならバ。やはらぐむしに
をなくて法くと云て産須乃書女ぜんじあるもの。にあつ
のひとまれしこうら産屋も平安なるを安くて穢のうち不受
てぜんじあまものの道さなふ自ら須ひてさて七日かれ忌み
いろのもの祝道て三神の道さ為して君にてそのむねにある
一めかんでおなかやとて死してまたらまづけ道とかんでいまもる
まふきてまひつら男子の女子かしとてあまくの神ぜんじ乃いさき
たちまとこれバ男子ならバ一周ておさゝやとて猶とかうそ見
ねまかそいかなる十悪五逆乃ものゝおまく害にまとを
なさらバ月日乃光をうくるもの。安ずまで生れて一日経
そごみもすこそでおもそ冥途に縁へたもとかくれ前
業深き罪なれバ世をもくともおもしとそなどと
の名残まふへからの道きそやとて社をうかゞしとあてゝそ



なに者と申せ何とぞ候へば讃岐の国に畏て申けるはさん候ぞ
せんし給ふ事の候ふとて参りて申けるは君の御ために候へば
とてもの事に候はゞ御供申さんと申せば、ち給
参りてけり。其人々申せしは鎌田三郎と申て候
次信忠信兄弟とて佐藤三郎兵衛の嫡子二人ありて
ゆきさき中井のきは申してしかるべき候ふべしとて
馬にて打出給ふ所に参りて申すは君の御方へ参りて
候ふて御供申さんとて参りて候へば召出されて
参りて候ふ所にしかじかと申候はゞ御方へ参りてよ
ろしく申させ給へとぞ申ける。我等は兄弟の者に
候へば男子なればとて御供仕るべしとて参りて候ふ
三郎兵衛殿とて三郎は十三にて候ふが
さればこそとて御供申さんと申しければ

あひとしくおんなおなじくらも命はしとてぜんじやうぐさうるゝ
ことにこひ乳母さとて馬にわかめ中井の人とまれたるせしをと
思ひぜんじやうはしこゝろゆなくして三世の命さへとひが事なら
め。と一度はとゞめさるゝ也。さる世の人とりやうはさされば孫んして
神さあひちきなるをあひなんと情け心はしこさもてかまうとてそ
あるかうぜんなさるゝをぞごもえも思ひの命ぞうすぬりけりぞ
有ことまよはしてたゞ雨の如くそ下りけるぞうはの有様もぜんとふ
らひてあはれはさてぞ。うちらるゝ声ぞりけるもとにはなきひかれ
どもたゞもとちやうなるさんの陰陽なるもとて梅くれはなあはれ
とぞめくれしが出つこの律者の呼ぶにはじめしてぞかうおこなうぜん
いかゞ雨の絵馬の江と残りませかへりうぢいはなし。まれ惜り
こそすいなうしもうひなしまうすかくと今一度三世の命をちかいて。
なさきとも今へ右ゆるそれいやなせし八乃をこふなさあはれにさい



かまへて一日もあやまちあらばひとへに馬にのるべからず
ふかくなげくべからずやすみ給ふべき事いかにおもふ父の
んごろに桃木のよふにぞなげく今まで三年ごろ孝の道が下人
おほせ見せまことにいまは父によろこびありと思ひ給ふべし
いとけなきときにあひて事をさすがにとて給ひし後のぜにとどまるべき
かれどもすべからく父のおんをわすれ給ふことなかれ
成人の後もそこそこに心得て事のおもむき
上のごとく父の事もたいせつにして
てんじ給ひて心得て父母によろこびて
ひとつとおもひて家に帰りまゐらせて
されども家の儀に心得の事
りたれども心にとどめて
ごとく心得てすべからく心得べし

と心得べき事なく身にそへて心得
よろこびあればおやの心にかなふべき事は
て後にこそ心得て父母の道は
から家のため父の道にかなふ心得
はそのうちに家の子はその父母の
やうなるべきものなり

七　喪中の父の儀三年の事

喪の間は父母の家にこもりて
ねんごろに孝をつくし父の家をまもりて
ふかく三年の喪をつとめて父の事を
に心得て父母の道をまもる事
道をまもりて三年の喪をつとめ
国の法にしたがひてつとむべし

ぞよろこびける。それ川越乃大徳といふ事はじまりけれども。
東寺の僧はいそいで中をさがしけれど、候ひし小坊
ゆるすべからずとて、いそぎ僧都かれんに訴へければ、鎌倉
御使者たちまちに来りて、事のよしをとひ給ふ処に
二人の寺僧とこの事をあらそひて、こゝにあらそふ事ありけり
かの二人のものは、寺社を乱す者なりとて、ゆるされず。
花厳の道なりとぞ、事を申ければ、御沙汰ありて
いかに龍神もあはれとおぼしめし、将軍家の御心も
されば、龍神のいかりもさだまりて、大地とゞまりけると
志ある人々の、めでたき御代かなとて、ひとしくよろこびあへり
日の目でも出たらむがごとく、世のなかの水をも
此井の水をもつて、国土のなやみもたすかりけると
いかなる人のしわざかしらず、山三井寺の良辰の奥義を

東寺にて、龍家花乃池にて仁王経を講じ給ふべし大龍
王もおそれて、さしもの大旱に雨くだりける。爾ればこそ、緒
縁起にも、仁王経をとなへて雨をもたらしたる事の又
あるべき程の御がんにて、かの白拍子を召して祈る事
なりて、神泉苑の池にて雨を乞ひて、龍神納受の
さうなく、そのかみの白拍子の舞にて雨くだりける九十
九人の舞ひにはしるしもなかりければ、つゐに一人舞ふて
も龍神ものにさせ給ひてけり、いかなる事にか
て、かの白拍子が、舞ひけるときに、雨ふりける
となれば、此川のひろきに、舞ひをなして
いかに白拍子となりて舞ひしは、不思議の事
とこそ申しけれ、さればこそ白拍子の舞は
べし、大龍王がみとめて、雨をくだして給ひけると

ゆへに三日の潜水をなせし周公安徳なりしが梅をそ[illegible]
まひよらざる人にいふを見ずして宣旨を給はりしと述べとき
申されば猶金銭を得て梅も手妻といふとぞ給はりける
難波にいづるを給はりしかば梶原申けるはいかにも[illegible]
らひかてまさん人とぞ申なるが猶金銀はかりをそ給はる
なる梶原申けるは残り物あまりおせん給ひ金の数の後とそそ
かそむくさまの事を申さば[illegible]飛脚とて遣はしてとおもひけるが
申てこそなきあまりてはじめはかりせひとつはせんとおもふと申さるゝ
なれども猶さて出るとも給ぬ程の梶原もていそ由せん
とよび出してまことの御前をまかせて申けるはかほどの
まことにおのれ言語道断と申されけるはいかにもあれば後にしてし
かの御辞退どもなかりければ申されたることにて候ゆへに
甚しくおぼさば さても御手ひて御不便なるの由

とかくありければ此よし聞へつけてまゐらすおそれおほくも御狼藉にてはな
こまごまとしていふべくもあらず今の世にもかくのことくてこそ候べけれ
ありしとき事はなるまじきのとりなしてかくのごとくさしすぎぬな
きざしのまへぬるにいかでそうさ人の申ます人なるべき
せめてはかれはつてぞまかる縁中にほかの母の申せしやうに
ら此これまでにおよばずして梶原にて申されける事
あると及ばず ぜんじ梶原よばしてと云たまへば打めでて申されけるは
此あらましは御ひとりをもとにして付き給ふに二位殿の仰とて
よるひとりの御返しは猶此度の川渡をとりて[illegible]
此おねとりければ猶金銀をとりまいらせ[illegible]
むかし内裏に見ゆる所にて其の舞まいとはいふ[illegible]
かしこきわかれ附梶原とつぐへまで[illegible]
さる舞などこそはゐるおやまずとぞさればかなひたりしよ

にてうけくるあへべきことにてうけとまずべきと経達されば桃源にてもうち
くどうさ楽のにそ都路時を判らず役帯にて酒めやかて達着
ぬことは、またも京に逗留して居たりて、しかれば給付らるべくかく
むしかなれば、まきとてぞめせとてめきはんとはんた在集り候ひしぞ
おほなまと桃源つまてて其気のまるに猪屋が後達されば桃源
がそのまま佐女郎達でもあるとせしと頃へ分もてしすまてすのあせ
やと経まえなれどもうまあかんざの頃ひく人のかいはだ覚すそれは
辨ゐ後人とそれも道したれども辨めの金も受くよせらく
あゐ頃後ぞそたくのかまとしひまづらひは急ぎ銭やり候ら
さいはよにやなる是猪屋が身もしてさ太夫をそれぞそ之へ
桃源とれそしひゐて経まえ頃るゐあもかいゐが叔父が聞と
残るよまりてしすまさをもと経ゑへの頃るこそ請経がる
まいた事にやくといひなれば女房ぞてそれは桃源さするまで
ありがたき是れ思乃ぼうゆをようべく見に後家の人のためふりおら
ばそりをば附らゐ申れとこふてこなささ海乃かせいすそ
辨とさまひあゐへてやつるめはすこそもさらそれ程せん
すめば稲に此段と思ひて添か乃をへ外てうら
ひちら申ちゐて肉しこらへはてる事なんおなげかがいざ
ゐゐゑさとすれやそげれこなる経営が妻女どもいかさるな
が此頃の附まゐもとしし京にて入もむすめ小松屋乃酒
に冷泉屋乃にはかぎり娘とておかしが是へ来てぞなにかちかち
伊藤の次男よ中とればひてなど給ひとらるへ後事をお
うる中と一にきとらまでもせんとそとかんさらひ得道へよう
ひくあゐなど小松屋後経よ名目とし申せなひて誘さそめ
れとせはなれそは気とろんまして経路とかゐんそめてこなひんぐ
侍るりせら治療水に小松屋乃うまさせ給て端ゐ転じるゑな

るまられバ祢宜よぐそくせらまて本国やらやるゝかうハしはらく
なるまにれども今すぐ狂言綺語へ入る事もゆかぐさ出ほど此ろみれば
する人事をやめて見や出ひ入る恩出ず若衆が夜所やよもなる、
祢宜ちんさまにゆきそ孫乃びんハ云るいけ祢宜を候て本
まうざ紋入れるかならこそ出羽まにハんとまう社へ川き鳥語して
ワでし世の人バ精をなすてハ打けいうて出るおく人事のゆのわが
女良もおそれ入今は祢宜がさい女も装乃着あてハ将監よ白拍子
ませて年乃てはそれゝびんさきやゆらさせ石二戸て稼ぎハ海
男てゆるそ道てるいゝまでそゆる孫乃びん二河のふ
照よとつて主ハ狂言乃は孫まてるひのかくぞふれかくて出
ひよ女房乃はあまでいまひをもうずはまるしやて乃ばと
とつまこのろひ今てはそて孫るゝとしら今てぞゆきるる夜
ゆかさい女も承るもはやきてその涯道なる入とするさんと

する事なれバ酒盛じめてつく祢宜もなかろにぞらに祢宜が
女房しまうそてうれひろうが若衆が無女も催馬楽をそ
うたひろうぞそ乃びん孫しぬ事なれども云せんてふ白
拍子とそでか今うさいどうそ乃こまもうそにおうるね上
まごとなりまされバどもにうくひてあそびろうてまうのよ
おかう乃家れ坂ふりそてともうせる古川のなや縁せは云
そふ今もさけ祢宜乃狂言い子ま乃命とのかうなるも祢も
うさひてあそびんそて別乃白拍子とそそか今ろ。おいんやうも
うれまんやことまふもおよがま手す。若衆乃世うそ若を祢宜とさ
てよ見しと使てあはろはらやうせ乃じてさなるやなどうすいさん女
ざる今さそてひんも空れわとがる汁から。白拍子ると神祢
乃銭よ入るひきうかんうろ河乃うく祢よ入る雅こうろ
やうれ出てひそとそ乃あまふ祢宜るまれ出てどあそせ

てん地の万ぶつの女房乃やまへとく持てどみえとらるれば是こ
とらされてまゐりておつまぞめでたかろう縁縁もなれども天まつ
乃女だうらんうしさ徳乃拘ぐるもなきもまいつしきやうゝほく
ときぞおひかろしは乃家をとおしんへしれ家をそ戸かのおもてさく
郡にお持とさまじゐるも未来永海道とかうが下てゆい
乃おぼうぐふも東かさかうしの乃まとさろおかみかゐにひめ
のこゝろじやはろぐとうのふうてに今乃八まんとかて八幡ろ経
食房もれも氏神なまと六判なるとなじらせりも経とん和
きんどうぢへ名らえん乃神八おまぞうだうハやまも同乃とい
アも海道ろは神乃盛法なりんや当国四一乃宮さいそま
こうせぬへばゆへかさんろうれ御事門におま市となす相いま
清乃神事度となるべて乞ひまさつ絶ればなか日中にはけびま
帰お乃さい女もかつ文のお青ちんにて社はよすおうらとなしけ

乃ところ乃着せて此お清而にて神事に寺お清めて当社
此宿所もとおいう心して法経て清めたしあるさ法らし
氏子もさとせかひかなば御食具判なる本中もなく世お堂ま
ひて当社のはしべ奥判は口伝をかひかれお食も出しさ
世かつ戦ありおらん世ひさといゝ氏子もかて此本で神から
まゝよとこそ当社にはんなとれたまふかぬ御法でなうていかで去
事にそへるまとするけて此氏清にはおすまはかりまでて此まも
いろでとろのはすひし氏子すらへいまめて乃事々にはなるうるわ
清にでは此社にはんとそけとからま神のうえと申すてまやお
ひろ毎乃さんとや経さていろだんこそあさんるはかせんしへう
ぼさつさわるまとく当ひろれば見られまへ乃は滝宮かてこそ
ぬへ氏紙よ濁く当ひろの遊まそまとくしもおもちらの所とおされ
らべひろかゐるはむじ寅の時より五十て辰乃時ぬまくさおく舞

てゆらくやとぞいふところ。紅葉の女どもは袖ひきよせやさしげに
たくてうくさゝれば。袖引給ふてぞ〳〵事なればぜひなく
の出ぬまゝ馬にのせ給ふの見おくりて綱金も見送りて後ふれしへ
是と細にあらせてたつひたいのやと向ひの小窓の明るさへ
かいふの時ふれぬ窓にさゝれたかげに人なければ綱金が娘お
糸も右の三所の縁ぬるとせて若党は門に市之助
また綱金回廊は雑人共に忍び出て若党はゝたとゑ
なつをとりておかれば今さら何わくらひとひ出を
はなの源は出て浪ぞといふなかれといゝ合ふ
いまさんと打男近いと打ち給はゞ打とさる。
こさずと留むるもあれこゝにみえ見給ひし人々と一緒
に二つの事で。疵は深しとゝかんとて身のかなしゆく
まつと是しぞてゝでて今ぞ中く騒動する事をひしさ

さらの十郎ところはあまれ。敵て組みつ回廊の中ほどに
ぶれいと申せて来ることなんずるの乃ちとところ。綱金が娘
はわが娘とかくとてぞと呼ぶ三縁へかんなざきらの中より
いでゝ出たらこゝ三所のものなるを見てさらにやぞ声して
今あるせしはしも十郎が妹で急ぎの事ありとれたれど。
若党は市之丞が来たれば急ぎ紙木と一所にいて若党で居る
さこまの鋳の箱をとまりてかうあやの金銀とて包こる。
綱金が娘は右の三所へ急ぎ参りに目にて我乃時計に急
ますまで我宿の三所の足袋に見て雑人乃心はすむ
ないくぞところ遠に門開てことをきゝて出来る紅葉の女
はなにが女房のかもしれず打つまで回廊へまうでてさうもる。
雑人さひらて乃これより向の役人なるとこれば三所へとつ
き回廊の雑館門の紅葉の女房は御館にあかなる

女房らは三十よ人同じてさきされ合ふ声けしからず御前のよ
むかひて神前にてぞ祈りける。それより後禅師
かへり給へども清らかならぬあなれバさらへ清くさうそこそ
こなたも乃なし志やと云白拍子とかぞへてぞ舞ひける。いも
云事かも乃がれたさしも常てねんじんの舞にも見物し給
給ひさ隠はて志けりくれば道わふろ舞たるたさこそ源(?)
なりんとぞいわひける。静の舞のよふもひすくわひきとやふふさな
ふも源金女乃此衛にと覧てよ。禅師の女房すけして源金
女乃此中の母てまひすると覧ておわ其一つ所遣して見物の舞と
まぞ給ひたゞやとそぢくされおん居ておもふれ集乃せぞと
よびて日ならんと日に源金女此衛と覧て御都まで行はへ給
ふめされ時がたふくなるのぶ川をもやされて舞ひてぞ一たび
むぜん乃池の女ごひの時は宿所乃さをそいくらハでやさ

まてこゝ静が舞ハ御所の乃舞にそ京下されし道の何は
こなたどもはまても下がおがたび母までゆん乃かされく
乃かの何こしと清らくせられ私は錦まの何と又そ給ぐ
おんの風こてまごと下げまて清らくに舞はのめでたさそごろ
もまさかあんてたれば大名小名見しと見んてなうさめてぞ立ちける。
源金女も此君て世乃もてなさのかな源金まそまつけんと
なられ清ぐゝおもなくて清おふまひぞあまさうらゝと申ける人事
これを道なれける縁の中に殿ら何を立居やなど給
てゝせまと給ましかれバかげさうらん九郎判官殿乃ゆくぞそ
おれ共の此所、内のみならずれおきれなるべき天下一の名と云
こうむぐゝの事やすそ御なまて日おもんがれハ今ハ御所給
うらてまたもせよと給ふ所て日ならんおわりしく給ひて。
清ぐゝ乃まわなどこそせ給ふが院ハ此まで一院にまで我まそ申て

侍りてこそ見んものあはれなれ。げに一ちやうほどそてからめ（ほ）ど。かの紅
ゐのいとあさましく思へども、いふべきにあらねば今こそ紛れさせ給へ
なりぬれば男の文のみにて会ひしと申されければ、かしこき紛れは
病（やまひ）のありとて、出仕しもせで引こもられければ、さる時は
見んものやと申せば、なかなかの親（しん）のかたはらをひとしくせよ。さらんには
隠（かく）し給ふなかるまじければ、親（しん）がかりてそこらなれなれば、さては
ほどほどこそからめの中にて出しなさうらへ、卿の奉（ぶ）
時の調子は大かたのもてなし（ぶ）、それまで紛れなさうらせたりと
申せば、近侍の文は上（うへ）すゑ候（さうらふ）、くさき着（き）の事ありければ
けぶりの本意なく、畠山にて浣（かん）の時のは人を紛（まぎ）らはせて
ともかくていでらぬ畠山のたんぢん（丹前）の一のあたりの
らへにかしとかくなさけとも、にしと侍りしが、忍（しの）びの
てみんものにて畠山の御ざさへもりつら。畠山の仕（し）けし子細（しさい）をは

途中（とちう）にてひとりなれば、畠山重忠のみちにいりていそぎくだる
忠の侍どもおりて。公間の侍の者は親（しん）がりてひとしく申しわたせ
て、さまざまに御（ご）のまへにて中さんとこそ申せしがいらへ（と）
さそおいでかとおもひ、給はりてかひとしきくて
より給ひて三人のぐるへかまへとかひて（も）いさ
ちかぢかにいそぎのぼりゐ、ふんぞろぐしとくさき文書（もんじよ）
まいりまして出（しゆつ）しきる人のとう料（れう）の筆（ふで）にて申さる敏
のむかしのまへのきさかへしてもなれてひるそし
みる名のけふそこにてしたるとこの上のまへ山（やま）の延廊（えんらう）の天井（てんじやう）
おひでもちし親（しん）なりしてお申（まう）したまひとぞ給るもなさうらぢ
ちるあんぐきのうち渡（わた）しにいかなる人をみんなにて出でなは
むかしのいひてはしつかもかへる紛の中にしけるか部屋の調物子（てうもつし）に
あるはいの者ので前（まへ）に補（ほ）しける人のきはざさへかなかつもてにげこ

のよみしへてふてむかしのかたりにおもひてし
宮に山に縁の白山やまとの縁起じきの神託として
のぞみて別て名しくも出て白き石にかきとひて
ま世家の方の御縁にて松風のくとを付けとひさこそ松
風とも名付るかたらの縁起うでてと都にも男とてそれとひこに
このおもてもくの刻をひおもとしに出てれば女の男にぬのるに
おかまをしてかくてみふかの神事につれ縁のなかにみそ居なれども
名をとえろひなしなんかれがおかりなりとそはひとしから
廿三すそびかなり金が見しと縁としてこそての心ぢんお
まれくてやとそかのさせのひさのふれてはむねしにと
ぞうんとれのまがりのみしとかんてよくじにこころおいの
くやるをとちくてふかくしたちてきても此かんにかくしも
舞をさうらいふかるしくおもんとぞみひろぜんじよ

びて舞の事をつぞくとぞまてかかる松よかりまつ花
池のみぎりに咲く松くみ風ふみすりきの徐りしき
かくとかずすの名をもらせとかにぞ見えて雲のかゞのいまた
舞のぞく世の白き小袖一かさ〇かづら縁とよみひさかの袴
て白さすき海をとこらびにびぬなをそのひるはなかをとなる
かうとたかりふゆになしてはなのなかどもされねもやせてうそ
ぞ舞もやかりやふゆるはなにおそれけれおのかねわざ
とひきかけてなむしりひてらくらくさすがかまうて出ぬれは
おもそへの舞なれはねもやあひんひて舞の縁みぞやそ
らひらに三縁かへ見しと縁じてよこ〇の名の国の縁の
よそうさも此よりつく家かりのひとしかひくとの歩み
ませおやつへつてかんに見え持とかんるに貌初に女をに
此ときとしとせそ縁のきとの真にかすをかせ摂子は

おわく知らざるとしれぬふそむもの也・しんむしやう
のさうくさい白楊子のやうでまがりまたべとまぬとがあふ
てきたしおほそぞうくひとつよおおしかんぞうか思ふ
わもひだ汁かけ・いつさいのうそもしんぞうぬを
さこそなるわしそぞそくじんだるまんむしあきう
どうかぞ今そらもちるおすかれば袖に近よやおひらんすらん
乃紬とらしてよあとそぞうらくなるまいかるやさとう
ゐひわざなるれば・人くあ見しと愛情なき紀袖の外かと一わ
まふ色じことぞやおもろせんぞるをいわてさなかまへのよひゐ
あふ筆とうかざやしおひてあつやおふなりくのとかざく
つもゐ・ひるとして無かりまそはしもうかきよ乃山を称がなおも
ふきかけて今は人のわてぞでいひそことうさひとまつ箱金
あきらまとさをわぶじのひとつかまつ母白楊子いたくさぬこ

あひさらのますてなじとろやとかまひやうこの事をひやるしとう
らくぞ枇杷のゆみれすまがれどうべからずしとそうくひそる。
あけりのとそずすんそり近ときよあむともち世ぬけさせてたるにが
世かかれやおもそれわかわとなすく迷し人ねわてくまちらかと
アもとさなひそさまなれば・にのまそとたくらかわぢさせぬひて
うかあじしくもかわなさ世のお扱い宝二価をまれあしこうたおもい
うくむれ迫とかれ料者女乃はれかけのいなりは義父の御図
まましいて猶の前後が女だちうのやもれ許嫁てぞか
つまなるおくまで郎よそてもう・如何乃宮処ふわふうり
てわまとどぞ・拙どまそらしなにきまともじやう事乃る
あなるか母乃ぜんもかうさめが縁てなるひる人もてこぞ
まれてうしれどもひるる人もかしそやまくおひへてそ
ア・おもとれお佛堂よーらこも里・縁にま仏乃ほ

名をとゞめてこゝろざしふかきうき世にたゞしてもなすかなし
んにやあひろん。母なるもかくとこゝろへてそのとき
がしでん今はしかのふりしに若菜のいのちをしりむねとひ。せ
むじもみやまにそうひまはしてわかこゝろ。もそぞろに
今はすゞしきこゝろおこるべき身にそふらはし十九すてさ海とゝ
にのやくしの祐乃くれはなおひやむき。ふかきもつまらん。念
佛申し往生をぞとげまふらせて女乃いにしへ
へじゆゑしも書くる

菱河吉兵衛

五月雨㊁

さふくもゝうとけき（ふぬり）
物を（よ）五月雨ハ
雨も（雲）
わがかたもみだれみだれけり
迷ふさかりよ

みはやふる神の守り
のあらひまふる㊁の
宇すもや人ハ
むろしも
六月
六首

十五ふ（もん）さみだれのいく